

頸椎後縦靱帯骨化症

頸椎には骨を上下方向に連結する靱帯がいくつかあり、それらの役割は首の骨を正常な位置に保持するだけでなく、首の異常な動きを制限して脊髄を保護することです。頸椎の椎体の前面、後面にはそれぞれ前縦靱帯と後縦靱帯があります。頸椎後縦靱帯骨化症とは脊髄に接している後縦靱帯が骨化して、脊髄を圧迫する病気です。欧米人に比較して日本人に比較的多く、その頻度は約3%とされています。また40～50歳代の男性に多く、糖尿病との関連が指摘されています。原因については遺伝子レベルでの研究が行われていますが、はっきりした結論は出ていません。診断は頸椎の単純レントゲン写真とCTで行いますが、脊髄の圧迫の程度をみるにはMRI検査が必要です。進行すると脊髄圧迫による頸部や肩の痛み、手足のしびれ感、手指の運動障害、歩行障害、膀胱直腸障害などを生じます。手足のしびれ感のみで症状が軽い場合は、装具をつけるなどして安静を保ち、薬物療法などの保存療法を行います。手指の運動障害（お箸が十分に使えないなど）や歩行障害（階段で手すりが必要になってきたなど）が出てきた場合には、手術が必要となる可能性が高いので、脊椎脊髄病指導医への受診を勧めします。手術は前方から骨化を薄くして浮上させるまたは取り除き、骨を移植して固定する方法（前方固定術）と、後方から椎弓を広げて脊髄の圧迫を解除する方法（椎弓形成術・脊柱管拡大術）があります。また症状がないか軽くても、転倒などの怪我で脊髄麻痺を生じることがあるので注意が必要です。